

『薔薇園のヤシの木』 ミード・ロバーツ作。

——私は（俺・僕でもよいです）

——A・B（は相手の名前を使って下さい）

A 「長くは居られないんだ。明日の朝、監督と会う約束なんだ」

B 「監督！ 監督！ 監督って 今夜私たち、何処に居たの？」

A 「監督のところでしょ」

B 「監督のところには居たことは分かった。監督の家はどこなの？」

A 「武蔵小金井」

B 「ばかけた名前だね。武蔵小金井って……」

A 「もういいよ！」

B 「私にプライドがあったら、今夜Aと一緒に出かけたりしなかった。ともかく行くべきじゃなかった。楽しくなかったもの！」

A 「Bだけがかってにふさぎこんでいたんじゃないか！ 誰もしらけてなんかいなかったよ。みんな楽しんでた。冗談いたり、歌ったりしてたじゃない！」

B 「Aは楽しんでいたの？」

A 「ああ、そうさ」

B 「Aは冗談いったり、歌ったりしてなかったじゃない。部屋の隅で監督と話していたでしょ。あれこれ、あれこれ、一晩中。みんな私のことを気の毒がっていたよ！」

A 「気の毒なんて誰も思っていないよ！ 私は帰るよ」

B 「座って！ 聞きたいことがある。今夜監督と話した？」

A 「今夜監督と話したこと、知っているじゃない！ どうしたんの狂ったの？」

B 「監督に私のこと話したって、聞いているの？」

A 「もちろん、Bのことを話したよ」

B 「それで？」

A 「監督は映画を作らない」

B 「作らないって！ どういう意味なの？」

A 「どういう意味って、どういう意味？ 監督は映画を作らないの」

B 「じゃあ、私の役はないの！ 私はおしまいなの。また大部屋入り！」

A 「まあ聞きなよ……」

B 「大部屋入りなの！」

A 「黙れ！」

B 「嘘つき！ 監督は映画を作るよ。私のこと監督に言わなかったんだ」

A 「電話して聞いてみろよ。私の言うことが信じられないなら！」

B 「そんな必要ないよ！ 会いに行くよ！ 今すぐ！ いったい何様だっというの」

A 「そんなに大事なことじゃないよ」

B 「大事なことでしよう、とても……もし映画が駄目になったなら、なぜ監督に明日の朝会うの？ 何か隠しての？」

A 「何も隠していないよ」

B 「いや、隠してるよ。言いなよ！」
A 「私は、行くの……」
B 「行って？ 何処へ行くの？」
A 「監督と京都へ行くの」
B 「京都？」
A 「監督はそこで映画を撮る……」
B 「いつ決まったの？」
A 「今夜」
B 「みんな、今夜思いついて、今夜決まったことなの？」
A 「そんなところ」
B 「よくもそんな嘘を私の目の前でつけるね。私がそんな嘘信じると思うの？」
A 「B！」
B 「黙れたって、黙らないよ！ みんなに聞こえるようにいってやるよ。聞いて欲しいよ。私がどんなに馬鹿だったか！」
A 「ヒステリーを起こすなら話しは打ち切り！」
B 「ヒステリーになるよ！」
A 「どうしろっていうの？ 仕事を断れっていうの？ 私にとってこんなに良い話なのに断れっていうの？ どうしろっていうの？」
B 「京都に連れてって！ それがして欲しいこと！」
A 「できない」
B 「できるよ！」
A 「できない！」
B 「連れてくべきでしょ！」
A 「落着きなよ。そうじゃないと話しをしないよ」
B 「落ち着けないよ。私はどうなるの？ どこへ行けばいいの？ 実家へ帰れって言うの？」
A 「家族がいるじゃない？」
B 「家族なんて。私が生きようが死のうが気にしない人たちだよ。なんであんな人たちのところへ行かなくちゃいけないの？」
A 「じゃ、行くよ」
B 「私はどうすればいいの？」
A 「……もう、自分で考えてみてもいい頃じゃない。じゃあ、おやすみ」
A、出て行く。
B 「そんなにやさしいことじゃないよ！ 後悔するよ。A！ 後悔するよ。きつと後悔するよ」

(せりふは原作とは異なりレッスン用に変えてあります)